

# 青年期の対人関係に関する研究 ( )

## 対人不安と社会的外向性・独立性との関連について

八 木 成 和

(平成19年9月27日受理 最終原稿平成19年11月26日受理)

青年期における重要な発達課題として、対人関係において積極的に他者と関わろうとする傾向を高めることと、親への依存から独立への過程、すなわち、独立性の発達が考えられてきた。そこで、本研究では、対人不安が、積極的に他者に関わろうとするかどうかという社会的外向性、独立しようとする意識である独立性と関連するかどうかを検討することを目的とした。426名の大学生を対象に、対人不安尺度の5つの因子と社会的外向性尺度、独立性尺度との関連を分析した。その結果、第一に、男女共に社会的外向性尺度と、対人不安尺度の「他者からの受容」因子と「対人的緊張・あがり」因子の2つの因子との間で有意な負の相関関係が見られた。第二に、男女共に独立性尺度と、対人不安尺度の「自己卑下・劣等感」因子と「対人的緊張・あがり」因子の2つの因子との間で有意な負の相関関係が見られた。以上の結果から、青年期の大学生に対して対人不安を低くするような試みによって支援することで、社会的外向性を高め、独立性を高めることにつながることを示唆し、今後、キャリア教育を進めていく上で対人不安の側面を考慮することが必要であることを提言した。

**キーワード：**青年期、対人不安、社会的外向性、独立性

### 問題と目的

青年期の対人不安は、これまで臨床的な場面における対人恐怖症との関連から検討されることが多かった(穂苅・福田・田中, 1996)。その後、対人恐怖症的な症状が広く日本人一般の意識にも共通しているという考えから日本人用の尺度が作成され(林・小川, 1981; 1982)。その後も、改良された日本人用のいくつかの対人不安尺度が作成された(八木, 2004、岡林・生和, 1991など)。そして、対人不安と関連する要因について検討されてきた。

八木(2004)では、対人不安尺度を作成し、第1因子「対人的緊張・あがり」因子、第2因子「自己卑下・劣等感」因子、第3因子「他者の印象への過剰意識」因子、第4因子「他者からの受容」因子、第5因子「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子の5つの因子を抽出した。そして、東大式エゴグラム第2版(末松・野村・和田, 1993)との関連を検討し、特に「FC」尺度と対人不安尺度の5つの因子との間で正の相関関係があることを見出した。「FC」の高い人がもつ、感情的であり、自由奔放な特徴は、集団内での同調への圧力が強い日本社会の集団内では、とけこみにくいことにつながり、それが、相手から拒否されたくない動機の高まりを発生させ、対人不安を高めることにつながっている可能性を示唆した。

また、八木（2005）では、対人不安尺度の5つの因子と、自意識の2つの因子（公的自意識と私的自意識）、自尊感情、楽観主義との関連の仕方が性別によって異なるかどうかを検討された。その結果、特に、公的自意識は、男女間で対人不安と関連の仕方が異なり、対人関係の状況において、男性の方は他者からのネガティブな評価を恐れる傾向が重要な意味をもっており、女性の方は自分自身に自信がないという意識が重要な意味をもっていることを示唆した。

以上の研究から青年期において対人不安は、自分と相手との関係についての意識や自意識が影響していた。したがって、対人不安が高いか低いかは、青年期に求められる発達課題に影響を与えると考えられる。

ハヴィガースト（1995）は青年期の発達課題の総括的な内容として、「仲間集団における成員の結びつき」と「独立性の発達」の2つをあげている。仲間集団における成員の結びつきに関しては、同年齢の仲間集団の役割が重視されている。この同年齢の仲間集団内の関係が「同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと」と「男性として、また女性としての社会的役割を学ぶこと」の2つの具体的な発達課題の習得に必要であると述べている。したがって、対人関係において積極的に他者に関わろうとする傾向は、青年期における重要な発達課題の1つである。この特徴は性格特性の1つでもある「社会的外向性」であり、「対人的に外交的、社交的、社会的接触を好む傾向」（八木，1989）と考えられる。また、独立性の発達には「両親や他の大人から情緒的に独立すること」など合計6つの発達課題が含まれ、これまでに青年期では親子関係との関連から「依存から独立への過程」が問題とされてきた。

わが国では青年期における独立性の問題は、久世（1958）によって進学や就職などの青年期における発達課題において誰の意見に従うかという測定方法によって検討されたり、加藤・高木（1980）によって独立意識の構造について検討されたりしてきた。このうち、加藤・高木（1980）では、中学生、高校生、大学生を対象に「独立性」「親への依存性」「反抗・内的混乱」の3つの尺度から構成される独立意識尺度が作成され、発達差と自己概念との関係について検討されている。その結果、実際の生活面では依存的であるが、独立性の意識は中学生の段階から高くなっていること、独立性は意欲性・活動性と強く関連していることを示した。

また、同じ尺度を用いた小野寺（1993）の研究では、日米の青年の親子関係と独立意識の関連が検討され、独立意識が米国男性、米国女性、日本男性、日本女性の順に低いことを示した。同様に、同じ尺度を用いた池田（2000）の研究でも、女性の方が男性よりも独立性が低いことが示され、小澤（1996）や三田（2003）では、女子青年や女性の独立意識の発達について検討された。以上の研究結果から独立意識の発達には、文化差や性差による違いが見られることが示されており、青年期の発達課題の達成の仕方には文化差や性差が影響していることが考えられる。

以上のように、社会的外向性と独立性は青年期の発達課題の達成に関連する要因である。これは、大学生が就職活動を行い、就職後も社会に適應する上で非常に重要な側面でもある。そこで、本研究では、対人不安が、積極的に他者に関わろうとするかどうかという特徴である社会的外向性、独立しようとする意識である独立性と関連するかどうかを検討することを目的と

した。

## 方 法

(1) 調査対象者：大阪府内の大学に通う大学生459名を対象とした。回収率は96.1%であった。欠損値を含む15名分のデータを除いた有効回答数は426名(96.6%)であった。

男性238名(55.9%)、女性188名(44.1%)であった。平均年齢は18.83歳(SD = 1.07)であった。

(2) 調査期間：2005年7月から12月の間に調査を実施した。

(3) 調査項目：矢田部ギルフォード性格検査(以下、Y-G性格検査と略す)の中から「社会的外向性」を測定する10項目を抽出して、使用した。回答形式は3段階評定(0.いいえ、1.どちらでもない、2.はい)とした。

加藤・高木(1980)の独立意識尺度の項目から「独立性」の尺度を構成する10項目を抽出して、使用した。回答形式は5段階評定(5.まったく自分にあてはまる、4.だいたい自分にあてはまる、3.どちらともいえない、2.あまり自分にはあてはまらない、1.まったく自分にはあてはまらない)とした。

八木(2004)で作成された対人不安測定尺度の35項目を使用した。回答形式は7段階評定(1.全然あてはまらない、2.あてはまらない、3.ややあてはまらない、4.どちらともいえない、5.ややあてはまる、6.あてはまる、7.非常にあてはまる)とした。この尺度は以下の5つの因子から構成された。すなわち、「対人的緊張・あがり」因子、「自己卑下・劣等感」因子、「他者の印象への過剰意識」因子、「他者からの受容」因子、「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子の5因子であった。

(4) 調査手続き：調査者が調査対象者の各自に配布し、記入後回収した。

## 結果と考察

(1) 「社会的外向性」尺度の項目分析

10項目に関して、「いいえ」を0点、「どちらでもない」を1点、「はい」を2点として得点化した。逆転項目は6項目であった。得点が高いほど、社会的外向性の傾向が強いことを示している。この10項目の全体と男女別の平均値(SD)をTABLE 1に示した。

項目ごとに、t検定により性差を分析した。t検定の結果をTABLE 1に示した。有意な性差が見られたのは、5項目であり、1項目で有意傾向が見られた(以下、カッコ内は性別の平均値[SD]を示している)。5項目とも女性の平均値の方が男性の平均値よりも有意に高かった。すなわち、「1.いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである。」(男性1.52 [.62] ; 女性1.74 [.48],  $p < .01$ )、「3.こちらから進んで友達を作ることが少ない。(逆転項目)」(男性.88 [.75] ; 女性1.09 [.72],  $p < .01$ )、「5.異性(男なら女)の友達はほとんどできない。(逆転項目)」(男性.90 [.82] ; 女性1.26 [.74],  $p < .01$ )、「8.新しい友達はなかなかできない。(逆転項目)」(男性1.16 [.77] ; 女性1.43 [.71],  $p < .01$ )、「9.無口である。(逆転項目)」(男性1.34

[.73] ; 女性1.58 [.58],  $p < .01$ ) の6項目であった。また、有意傾向が見られた「7. 誰とでもよく話す。」(男性1.09 [.74] ; 女性1.23 [.72],  $p < .10$ ) の項目でも女性の平均値の方が男性の平均値よりも高い傾向が見られた。女性の方が男性よりも人と知り合いになったり友だちを作ったりすることに積極的であった。

TABLE 1 社会的外向性尺度の測定項目の全体と男女別の平均値 (SD)

NO	項 目 内 容	全 体		男 性		女 性		t値
		M	SD	M	SD	M	SD	
1	いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである。	1.62	.58	1.52	.62	1.74	.48	4.14**
2	知らぬ人と話すときはかたくなる。#	.67	.74	.65	.74	.69	.75	.48
3	こちらから進んで友達を作ることが少ない。#	.97	.74	.88	.75	1.09	.72	2.83**
4	人目に立つようなことは好まない。#	.86	.72	.85	.73	.87	.71	.20
5	異性(男なら女)の友達はほとんどできない。#	1.06	.80	.90	.82	1.26	.74	4.67**
6	人と広くつきあうのが好きである。	1.40	.69	1.38	.70	1.41	.68	.48
7	誰とでもよく話す。	1.15	.73	1.09	.74	1.23	.72	1.91 +
8	新しい友達はなかなかできない。#	1.28	.76	1.16	.77	1.43	.71	3.79**
9	無口である。#	1.45	.68	1.34	.73	1.58	.58	3.59**
10	人中に出てもまごつかない。	.98	.70	1.01	.73	.94	.67	1.12

ただし、#のついた項目は逆転項目を示す。また、\*\* :  $p < .01$ 、+ :  $p < .10$ とする。

本尺度の信頼性を検討した結果、Cronbachの係数は.80であり、内的整合性は確保されたと判断できた。社会的外向性尺度の10項目の合計得点を算出し、社会的外向性の得点とした。全体の平均値は、11.42 [SD=4.33] であり、男性の平均値は、10.79 [SD=4.41] であり、女性の平均値は12.23 [SD=4.09] であった。性差についてt検定によって分析した結果、有意差が見られた ( $t(424) = 3.45$ ,  $p < .01$ )。

## (2) 「独立性」尺度の項目分析

10項目に関して、「まったく自分にあてはまる」の5点から「まったく自分にはあてはまらない」の1点までとして得点化した。逆転項目は3項目であった。得点が高いほど、独立性の意識が強いことを示している。この10項目の全体と男女別の平均値 (SD) をTABLE 2 に示した。

項目ごとに、t検定により性差を分析した。t検定の結果をTABLE 2 に示した。有意な性差は、見られなかったが、「10. 小さなことでも、自分で決断することができない。(逆転項目)」(男性3.79 [1.12] ; 女性3.60 [1.09]) の1項目で有意傾向が見られた(カッコ内は性別の平均値 [SD] を示している)。男性の平均値の方が女性の平均値よりも高い傾向が見られた。

本尺度の信頼性を検討した結果、Cronbachの係数は.77であり、内的整合性は確保されたと判断できた。独立性尺度の10項目の合計得点を算出し、独立性の得点とした。全体の平均値は、34.00 [SD=6.39] であり、男性の平均値は、34.03 [SD=6.78] であり、女性の平均値は

TABLE 2 独立性尺度の測定項目の全体と男女別の平均値 (SD)

NO	項 目 内 容	全 体		男 性		女 性		t値
		M	SD	M	SD	M	SD	
1	自分の人生を自分で築いていく自信がある。	3.50	1.04	3.52	1.12	3.48	.94	.32
2	たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。	3.68	1.10	3.68	1.15	3.68	1.03	.05
3	自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。#	3.13	1.36	3.05	1.37	3.24	1.33	1.46
4	社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	3.35	1.13	3.28	1.23	3.43	.99	1.36
5	自分の考えが変わりやすく自信を持ってない。#	3.12	1.23	3.17	1.26	3.05	1.19	1.04
6	生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	3.46	1.10	3.43	1.20	3.48	.94	.48
7	生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	3.17	1.09	3.18	1.18	3.17	.97	.06
8	周りの人と意見が違って、自分が正しいと思うことを主張できる。	3.38	1.03	3.42	1.10	3.34	.94	.88
9	自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	3.50	1.01	3.50	1.05	3.49	.94	.15
10	小さなことでも、自分で決断することができない。#	3.71	1.11	3.79	1.12	3.60	1.09	1.84+

ただし、#のついた項目は逆転項目を示す。また、+ :  $p < .10$ とする。

33.95 [SD=5.89]であった。性差についてt検定によって分析した結果、有意差は見られなかった。小野寺(1993)や池田(2000)では、女性の独立性が男性よりも低いことが示されており、本研究の結果と異なっていた。調査対象者の特質の違いとも考えられ、今後検討していきたい。

### (3) 対人不安尺度の項目分析

35項目に関して、「非常にあてはまる」の7点から「全然あてはまらない」の1点までとして得点化した。得点が高いほど、その項目内容にあてはまることを示している。この35項目の全体と男女別の平均値(SD)をTABLE 3に示した。

項目ごとに、t検定により性差を分析した。t検定の結果をTABLE 3に示した。有意な性差が見られたのは、9項目であった(以下、カッコ内は性別の平均値[SD]を示している)。9項目とも女性の平均値の方が男性よりも有意に高かった。また、6項目で有意傾向が見られ、1項目で男性の平均値の方が女性よりも有意に高い傾向が見られ、5項目で女性の平均値の方が男性よりも有意に高い傾向が見られた。

本尺度の信頼性を検討した結果、各因子のCronbachの係数は「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子が.79、「他者からの受容」因子が.75、「他者の印象への過剰意識」因子が.68、「自己卑下・劣等感」因子が.83、「対人的緊張・あがり」因子が.92であった。「他者の印象への過剰

意識」因子の係数が高くないが、おおむね各因子の内的整合性は確保されたと判断できる。

各因子を構成する合計得点を算出し、各因子の得点とした。全体と男女別の平均値をTABLE 3 に示した。全体の平均値は「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子が21.20 [SD=4.95]

TABLE 3 対人不安尺度の測定項目の全体と男女別の平均値 (SD)

NO	項目内容	全体		男性		女性		t値
		M	SD	M	SD	M	SD	
	「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子	21.20	4.95	20.11	5.32	22.59	4.05	5.29**
1	好きな異性に親切にされると気ははずかしい。	5.31	1.71	5.14	1.82	5.51	1.52	2.22*
2	友人にほめられるのは照れくさい。	4.97	1.58	4.61	1.72	5.43	1.25	5.43**
3	尊敬する人からほめられると気ははずかしい。	5.26	1.58	4.97	1.70	5.62	1.34	4.25**
4	みんなの前でほめられると照れてしまう。	5.66	1.46	5.37	1.62	6.03	1.13	4.73**
	「他者からの受容」因子	18.66	4.82	18.47	4.78	18.90	4.86	.90
5	すべての人から受け入れられたい。	4.63	1.75	4.53	1.79	4.76	1.70	1.35
6	自分が相手の人に嫌な感じを与えているように思ってしまうことがある。	5.31	1.25	5.31	1.20	5.31	1.32	.02
7	他のすべての人々から愛され、認められることが重要である。	4.05	1.74	3.97	1.82	4.14	1.63	1.02
8	他人から好かれることこそ大切である。	4.68	1.60	4.67	1.66	4.69	1.52	.12
	「他者の印象への過剰意識」因子	22.76	6.46	22.39	6.84	23.23	5.94	1.34
9	人と自然につき合えない。	3.19	1.63	3.29	1.70	3.05	1.53	1.55
10	見知らぬ人と偶然一緒になっただけでも、気まずさを感じることもある。	3.72	1.80	3.85	1.89	3.56	1.67	1.68+
11	人と会う時、自分の顔つきが気になる。	3.66	1.78	3.53	1.86	3.84	1.66	1.76+
12	見知らぬ人に親切にされると、気ははずかしさを感じる。	3.74	1.64	3.65	1.68	3.85	1.57	1.22
13	自分の顔つきや目つきが、人に悪い印象を与えるのではないかと不安になることがある。	3.96	1.81	3.69	1.86	4.30	1.68	3.50**
14	友人と一緒にいる時、得意なことでも失敗すると恥ずかしい。	4.49	1.76	4.37	1.89	4.64	1.56	1.59
	「自己卑下・劣等感」因子	19.67	6.46	19.24	6.63	20.22	6.22	1.55
15	将来の自分には、あまり期待が持てない。	3.97	1.68	3.95	1.79	4.01	1.54	.40
16	自分のことがあまり好きではない。	3.86	1.65	3.79	1.72	3.95	1.57	1.01
17	何をやってもうまくいかない気がする。	3.59	1.62	3.52	1.67	3.68	1.54	1.01
18	自分は人より劣っていると思う。	4.03	1.64	3.90	1.76	4.20	1.44	1.87+
19	自分が人にどう見られているのか、クヨクヨ考えてしまう。	4.22	1.81	4.09	1.86	4.38	1.74	1.67+
	「対人的緊張・あがり」因子	67.88	18.74	66.38	19.54	69.78	17.55	1.86+
20	電車の中で先生や目上の人に出会うと、気まずさを感じてしまう。	3.87	1.85	3.73	1.90	4.04	1.78	1.70+
21	人前に出るとオドオドしてしまう。	4.21	1.81	4.04	1.85	4.43	1.74	2.18*
22	異性の前で叱られると格好悪い。	4.39	1.74	4.47	1.80	4.29	1.67	1.05
23	権威ある地位の人に話しかける時、たいてい緊張する。	5.04	1.62	4.89	1.73	5.24	1.44	2.25*
24	人が大勢いると、うまく会話に入っていけない。	4.25	1.72	4.20	1.80	4.31	1.61	.67
25	大勢の人の前へ出ると、足がふるえ胸がつかまる。	3.46	1.81	3.39	1.82	3.53	1.80	.78
26	人が大勢いると、気後れしてしまう。	3.94	1.71	3.83	1.74	4.07	1.66	1.48
27	大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。	3.96	1.85	3.98	1.87	3.93	1.84	.32
28	先生に間違いを指摘されると、恥ずかしくなる。	4.04	1.76	3.84	1.83	4.30	1.64	2.68**
29	あまり知らない人に話しかける時、あがってしまう。	4.13	1.76	4.09	1.84	4.18	1.66	.54
30	異性と二人きりだと、相手を意識してまどぎちくなることもある。	4.42	1.78	4.52	1.87	4.29	1.67	1.32
31	人がたくさんいると、気ははずかしくて話せない。	3.52	1.68	3.45	1.74	3.61	1.61	.98
32	大勢の人の前で転んだら、すぐにその場から逃げ出したくなる。	4.77	1.90	4.38	2.02	5.26	1.61	4.86**
33	魅力的な異性に話しかける時、緊張してしまう。	5.26	1.61	5.21	1.74	5.34	1.44	.82
34	知っている人を見かけでも、顔を合わせないように道をさけてしまうことがある。	4.35	1.81	4.23	1.87	4.50	1.73	1.53
35	人前で話す時、たいていあがってしまう。	4.29	1.85	4.14	1.91	4.48	1.75	1.89+

ただし、\*\* : p<0.01、\* : p<0.05、+ : p<0.10とする。

「他者からの受容」因子が18.66 [SD=4.82]、「他者の印象への過剰意識」因子が22.76 [SD=6.46]、「自己卑下・劣等感」因子が19.67 [SD=6.46]、「対人的緊張・あがり」因子が67.88 [SD=18.74]であった。

男性の平均値は「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子が20.11 [SD=5.32]、「他者からの受容」因子が18.47 [SD=4.78]、「他者の印象への過剰意識」因子が22.39 [SD=6.84]、「自己卑下・劣等感」因子が19.24 [SD=6.63]、「対人的緊張・あがり」因子が66.38 [SD=19.54]であった。

女性の平均値は「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子が22.59 [SD=4.05]、「他者からの受容」因子が18.90 [SD=4.86]、「他者の印象への過剰意識」因子が23.23 [SD=5.94]、「自己卑下・劣等感」因子が20.22 [SD=6.22]、「対人的緊張・あがり」因子が69.78 [SD=17.55]であった。

性差について検定によって分析した結果、「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子において有意差が見られ ( $t(424) = 5.29, p < .01$ )、「対人的緊張・あがり」因子において有意傾向が見られた ( $t(424) = 1.86$ )。「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子において女性の平均値の方が男性よりも有意に高く、「対人的緊張・あがり」因子においても女性の平均値の方が男性よりも有意に高い傾向が見られた。女性の方が男性よりも他者に対して照れや気恥ずかしさを感じやすく、対人場面において緊張したり、あがったりしやすい傾向が見られた。八木(2004)でも同様に「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子において女性の平均値の方が男性よりも有意に高い結果が示されている。

#### (4) 対人不安尺度と社会的外向性、独立性との関連

対人不安尺度の5因子と社会的外向性尺度、独立性尺度との間で男女別にピアソンの積率相関係数を算出した。その結果をTABLE 4 に示した。第一に、対人不安尺度の5因子と社会的外向性尺度との関連について検討する。

まず、「対人的緊張・あがり」因子では、男女共に有意な中程度の負の相関関係が見られた。男性では、 $r = -.516 (p < .01)$ 、女性では、 $r = -.587 (p < .01)$ であった。男女共に、対人場面において緊張したり、あがったりする人ほど社会的外向性の傾向が低く、反対に、対人場面で緊張やあがりを感じない人ほど社会的外向性の傾向が高かった。

また、「他者の印象への過剰意識」因子と「自己卑下・劣等感」因子の2つの因子では、男女共に有意な負の相関関係が見られたが、男性の方が女性よりも相関関係が強く見られた。す

TABLE 4 男女別の対人不安の5因子と社会的外向性・独立性との相関係数

対人不安尺度		他者への照れ・ 気恥ずかしさ	他者からの受容	他者の印象への 過剰意識	自己卑下・劣等感	対人的緊張・ あがり
社会的 外向性	男性	-.183**	.098	-.441**	-.374**	-.516**
	女性	-.021	.151*	-.327**	-.251**	-.587**
独立性	男性	-.243**	-.202**	-.368**	-.581**	-.500**
	女性	-.189**	-.155*	-.426**	-.541**	-.434**

ただし、\*\* :  $p < .01$ 、\* :  $p < .05$ とする。

なわち、「他者の印象への過剰意識」因子では、男性は $r = -.441$  ( $p < .01$ )であり、女性は $r = -.327$  ( $p < .01$ )であった。「自己卑下・劣等感」因子では、男性は $r = -.374$  ( $p < .01$ )であり、女性は $r = -.251$  ( $p < .01$ )であった。他者からどう見られているのかを過剰に意識し、劣等感を強く感じている人は、社会的外向性の傾向が低く、反対に、他者からどう見られているのかをあまり意識しないで、劣等感をあまり感じていない人は、社会的外向性の傾向が高かった。

「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子と「他者からの受容」因子の2つの因子では、男女共に相関係数の値は小さく、相関関係は見られなかった。

以上の結果から、男女共に、他者から見られている印象を強く意識し、劣等感が強く、対人場面において緊張したり、あがりたりしやすい人は、対人関係において積極的に他者に働きかけていく傾向が低かった。反対に、他者から見られている印象をあまり意識しないで、劣等感が弱く、対人場面においてあまり緊張したり、あがりたりしない人は、対人関係において積極的に他者に働きかけていく傾向が高かった。しかしながら、男性の場合、社会的外向性と「他者の印象への過剰意識」因子と「自己卑下・劣等感」因子の2つの因子では、男性の方が負の相関係数の値が女性よりも大きく、反対に、「対人的緊張・あがり」因子では、女性の方が負の相関係数の値が男性よりも少し大きかった。男女間で関連の強さにおいて違いが見られた。

第二に、対人不安尺度の5因子と独立性尺度との関連について検討する。まず、「自己卑下・劣等感」因子と「対人的緊張・あがり」因子の2つの因子では、男女共に有意な中程度の負の相関関係が見られた。すなわち、「自己卑下・劣等感」因子では、男性は $r = -.581$  ( $p < .01$ )、女性は $r = -.541$  ( $p < .01$ )であった。「対人的緊張・あがり」因子では、男性は $r = -.500$  ( $p < .01$ )、女性は $r = -.434$  ( $p < .01$ )であった。男女共に、劣等感が強く、対人場面において緊張したり、あがりたりする人ほど独立性の傾向が低く、反対に、劣等感が弱く、対人場面において緊張しないし、あがらない人ほど独立性の傾向が高かった。

そして、「他者の印象への過剰意識」因子では、負の有意な相関関係が見られ、男性は $r = -.368$  ( $p < .01$ )であり、女性は $r = -.426$  ( $p < .01$ )であった。他者からどう見られているのかを過剰に意識している人は、独立性の傾向が低く、反対に、他者からどう見られているのかをあまり意識しない人は、独立性の傾向が高かった。

また、相関係数自体は低い値であったが、男性において、独立性と「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子と「他者からの受容」因子の2つの因子で有意なかなり弱い負の相関関係が見られた。すなわち、「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子では、 $r = -.243$  ( $p < .01$ )であり、「他者からの受容」因子では、 $r = -.202$  ( $p < .01$ )であった。女性の方でも有意ではあったが、相関係数の値は小さく関連は見られなかった。

以上のように、男女ともに、他者から見られている印象を強く意識し、劣等感が強く、対人場面において緊張しやすく、あがりやすい人は、独立性が低く、自分自身で自信を持って生きていこうとする傾向が低かった。反対に、他者から見られている印象をあまり意識しないで、劣等感が弱く、対人場面においてあまり緊張しないし、あがらない人は、独立性が高く、自分自身で自信を持って生きていこうとする傾向が高かった。



しかしながら、独立性と「自己卑下・劣等感」因子と「対人的緊張・あがり」因子の2つの因子では、男性の方が負の相関係数の値が女性よりも大きく、反対に、「他者の印象への過剰意識」因子とでは、女性の方が負の相関係数の値が男性よりも大きかった。男女間で関連の強さにおいて違いが見られた。そして、男性においてのみ、独立性と「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子と「他者からの受容」因子の2つの因子の間で弱い負の相関関係が見られた。男性の場合、対人場面において照れや気恥ずかしさを感じ、他者から受容されたいと感じている人は、独立性が低く、反対に、対人場面においてあまり照れたりすることなく、気恥ずかしく感じず、他者から受け入れられたいと感じていない人は、独立性が高かった。

次に、男女別に社会的外向性と独立性のそれぞれを従属変数とし、対人不安尺度の5つの因子を独立変数とする重回帰分析を実施した。分析結果をTABLE 5に示した。社会的外向性を従属変数とする重回帰分析では男女共に予測式は有意であった。標準偏回帰係数を見ると、「他者からの受容」因子と「対人的緊張・あがり」因子では、男女共に有意な関連が見られた。そして、男性においてのみ「他者の印象への過剰意識」因子と「自己卑下・劣等感」因子の2つの因子で有意な弱い関連が見られた。

TABLE 5 男女別の対人不安尺度と社会的外向性、独立性との標準偏回帰係数

対人不安尺度	他者への 照れ・気恥 ずかしさ	他者からの 受容	他者の 印象への 過剰意識	自己卑下・ 劣等感	対人的緊張・ あがり	調整済 R <sup>2</sup>	F値
社会的 外向性	男性 .062	.346**	-.198**	-.154**	-.466**	.395	32.0**
	女性 .108	.338**	-.021	-.078	-.663**	.450	31.6**
独立性	男性 -.007	-.009	.037	-.448**	-.308**	.391	31.5**
	女性 -.027	.084	-.093	-.421**	-.199*	.328	19.2**

ただし、\*\* : p<.01、\* : p<.05とする。

次に、独立性を従属変数とする重回帰分析でも男女共に予測式は有意であった。標準偏回帰係数を見ると、男女共に「自己卑下・劣等感」因子と「対人的緊張・あがり」因子の2つの因子で有意な関連が見られた。しかし、女性においては、「対人的緊張・あがり」因子の標準偏回帰係数は -.199 (p<.05) であり、男性の係数である -.308よりも値が小さく関連が弱かった。男女共に劣等感が強いほど独立性が低く、劣等感が弱いほど独立性が高く、男性の方が女性よりも対人場面において緊張したり、あがったりする人ほど独立性が低く、緊張しないし、あがらない人ほど独立性が高かった。

以上のことから対人不安が社会的外向性と独立性と関連していることが示された。金(2005)は韓国と日本の大学生を対象に対人不安に影響する要因として公的自己意識、相互依存的自己、同一性確立の3つをあげ、共分散構造分析により対人不安に対する3つの要因の影響を示すモデルを提示している。その結果、対人不安に対して3つの要因が影響していることを示した。

日本社会は、欧米の相互独立的自己観に対して、相互協調的自己観であると考えられている

(Markus, & Kitayama, 1991)。つまり、日本社会では、様々な社会的関係の中で他者と相互に依存しあい調和した関係を大切にしている。金(2005)で使用され、対人不安に影響していた1つの要因であった相互依存的自己も相互協調的自己観に基づいて作成された尺度である。重回帰分析の結果、社会的外向性に男女とも「他者からの受容」因子と「対人的緊張・あがり」因子が強く影響していたことから、他者から受け入れられたいという意識が高く、対人場面において緊張したり、あがったりすることによって対人場面において積極的に振る舞えなくなっていると考えられる。このことは、他者と相互に依存しあい調和した関係を重視する文化の影響でもありと考えられる。

また、独立性に男女とも「自己卑下・劣等感」因子が強く影響し、「対人的緊張・あがり」因子が特に男性で強く影響していたことから、劣等感が強く、特に男性で対人場面において緊張したり、あがったりする人は独立性の意識が低かった。対人場面において自信をもてないことが自分に自信を持ち、積極的に社会に働きかけていく意識を低くしていた。金(2005)では、同一性の確立が対人不安に影響していることを示している。青年期には自立した意識を形成することが対人不安と関連しており、青年期の問題を考える上で重要であることが示された。したがって、青年期にある大学生に対して対人不安を低くするような試みが、社会的外向性を高め、独立性を高めることにつながると考えられる。

現在、日本では青年期におけるニートやフリーターが問題とされており(小杉, 2005他)大学でのキャリア教育の重要性が指摘されている(谷内, 2005)。加藤(2007)では、大学生へのキャリア意識と自己評価に関する調査結果から、キャリア意識の低い学生は、「自分で一步を踏み出す勇気や自信がない。自分の生き方に悩みはしても、その悩みを解決したり、欲しいものを手に入れたいするには、自分で決断し動いて、他と関わらなければならないのだということと結びついていないようである。」(p.128)と考察している。ここで記されている特徴は、青年期の社会的外向性や独立性の発達に関わるものである。この背景には、対人不安の問題が関連していると考えられ、女子短期大学生を対象とした仮想的な就職時の面接場面での対人不安傾向の影響を検討した研究(佐藤・丹野・佐々木, 2004)では、対人不安傾向が面接場面での状態不安と関連していることが示されている。大学生へのキャリア教育を進めていく上でも対人不安の側面を考慮していく必要があると思われる。

今後の課題として、対人不安と対人関係場面での対処行動との関連が検討される必要がある。対人関係場面で対人不安が高い場合、対処行動がうまく取れれば、結果的に自分に自信が付き対人不安が低くなることが予測される。鈴木・藤生・田上(1999)では、女子青年において自己効力感の高さが対人関係に関連していることが示されている。対人関係においてどのように対処すべきかを学習し、対人不安を軽減することによって自分に自信を持つことができ、自己効力感も高まっていくと考えられる。つまり、対人不安が高い場合でも適切な支援をすることによって対人関係に自信がもてるようになるのである。今後のキャリア教育における支援方法を考える上でも対人不安と対人場面での対処行動について検討する必要がある。

## 引用文献

- ハヴィガースト,R.J. 1995「人間の発達課題と教育」 荘司雅子(監訳) 玉川大学出版部 (Havighurst,R.J. 1953 Human Development and Education Longmans,Green & Co..)
- 林洋一・小川捷之 1981「対人不安意識尺度構成の試み」 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.
- 林洋一・小川捷之 1982「対人不安意識尺度構成の試み - その2 - 」 横浜国立大学保健管理センター年報, 2, 19-37.
- 穂苅千恵・福田周・田中康裕 1996「青年期対人不安の実証的研究の今後 対人恐怖と境界例の関連性をふまえて」 性格心理学研究, 4, 1, 38-46 .
- 池田和夫 2000「日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究」 高知大学学術研究報告・人文科学, 49, 105-113.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980「青年期における独立意識の発達と自己概念との関係」 教育心理学研究, 28, 4, 336-340.
- 加藤かおり 2007「8章 大学生のキャリア意識と自己認識」 国立教育政策研究所(編)「キャリア教育への招待」 東洋館出版社, 121-129.
- 金美伶 2005「韓国と日本の大学生における対人不安と同一性、公的自己意識、相互依存的自己との関係」 パーソナリティ研究, 14, 1, 42-53.
- 久世敏雄 1958「心理的離乳」 依田新(編)「家族の心理」 培風館, 70-89.
- 小杉礼子 2005「フリーターとニート」 勁草書房.
- Markus,H.R. & Kitayama,S. 1991 Culture and self:Implications for cognition, emotion,and motivation. Psychological Review, 98, 224-253.
- 三田 英二 2003「独立意識からみた女性の自己の発達」 青年心理学研究, 15, 1-15.
- 岡林尚子・生和秀敏 1991「対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究」 広島大学総合科学部紀要, 15, 1-9.
- 小野寺敦子 1993「日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究」 心理学研究, 64, 2, 147-152.
- 小澤真 1996「女子青年の独立意識と親子間の心理的距離との関連」 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 34, 39-50.
- 佐藤香織・丹野義彦・佐々木淳 2004「女子短期大学生の対人不安傾向と仮想的面接評価場面における自己注目の関係」 パーソナリティ研究, 13, 1, 104-105.
- 鈴木由美・藤生英行・田上不二夫 1999「女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性(社会的内向性・思想的内向性)の影響について」 和洋女子大学紀要・文系編, 39, 129-138.
- 末松弘行・野村忍・和田迪子 1993「TEG 東大式エゴグラム 第2版 手引」 金子書房 .
- 八木成和 2004「青年期の対人関係に関する研究( ) 対人不安尺度とTEGとの関連について」 四天王寺国際仏教大学紀要人文社会学部, 37, 57-68.
- 八木成和 2005「青年期の対人関係に関する研究( ) - 対人不安の性差に影響する要因について - 」 四天王寺国際仏教大学紀要人文社会学部, 38, 79-91.
- 八木俊夫 1989 新版 YGテストの実務手引 日本心理技術研究所.
- 谷内篤博 2005「大学生の職業意識とキャリア教育」 勁草書房.